

## 魅力的な人柄を偲ぶ（星亮一『後藤新平』）

金子宗徳

明治維新は、世界史的に見れば、「近世三〇〇年の西洋の世界支配を、根本的に變革する人道的行爲」（保田與重郎）だった。とは云へ、変革の過程で新たな歪みが生じたこともまた、否定できない。戊辰戦争に敗北した東北諸藩は、「朝敵」の汚名を着せられ、「白河以北一山百文」と蔑まれるに至った。

けれども、少なからぬ東北人が、さうしたハンディを克服し、ひいては、我が国の近代化に大きく貢献した。現在の岩手県水沢市に生まれ、内務省衛生局長・台湾総督府民政長官・満鉄総裁・鉄道院総裁・東京市長などを歴任した後藤新平は、その代表格と云つてよいだらう。

「蛮社の獄」に連座した高野長英の縁者に当たる新平は、福島県の須賀川医学校に学んだ。その後、愛知県病院の医師となり、岐阜で暴漢に襲はれた板垣退助を診察したこともあった。このまゝ、医師の道を全うしたとしても、成功したであらう。

だが、新平は、医療現場に留まらず、「衛生」行政に関する専門家として、その知見を社会整備に応用した。こゝで見逃してはならぬのは、「衛生」といふ発想の近代性である（「衛生」といふ言葉じたい、岩倉遣欧使節団に随行し、ヨーロッパの医療行政を視察した長與専齋により始めて用ゐられたものである）。「衛生」状況を改善するためには、社会全体を「システム」として把握する眼差しが求められる。その上、その眼差しは「衛生」といふ限られた分野に留まらなかった。新平は満鉄総裁に就任すると、《満鉄調査部》・《東亜経済調査局》を設置したが、これは、「システム」としての社会を総合的に調査・研究するシンクタンクの先駆けであつた。また、台湾総督府民政長官として、児玉源太郎総督のもと、「生物学の原則」を掲げて旧慣温存政策をとり、統治の実を挙げたが、これなども、その眼差しと関係してゐる。旧来の慣習を、完結した「システム」と見るがゆゑに、いたづらな介入を避けたのである。

「システム」に対する眼差しは、鉄道への関心にも繋がつてゐる。鉄道は、国内の諸地域を結合するものであり、それ全体が社会的なシステムである。さらに、その組織をスムーズに運営するために、内部に様々なシステム——限られた線路を有効に活用するための列車ダイヤ、安全な輸送を確保するための保安設備など——が組み込まれてゐる。

これら「システム」に関心を持つ新平は、決して無味乾燥な人物ではなかつた。星氏は、新平の魅力的な人柄が偲ばれるエピソードを数多く紹介してゐる。いかなる権力者といへども遠慮なく懐に飛び込み、自分を認めさせる度胸の持ち主だつたこと。また、癩癩持ちで、仕事に対しても厳しかつたが、情け深い側面も持ち合はせてをり、部下からも慕はれたこと。晩年は、ボーイスカウト運動を指導し、子供に温かい眼を注いだこと。

東北地方出身である星氏の筆致は、郷土の大先輩に対する敬愛の情に溢れてゐる。その反面、旧敵（？）である薩長に対する評価が辛辣に過ぎるやうな気がする。児玉にしろ、その死後に信任を得た桂太郎にしろ、「長州閥」に属してゐた。また、大川周明との関係に触れられてゐないのは残念である。東北地方（酒田）出身である大川は、《東亜経済調査局》に勤務するだけでなく、新平の推挙により拓殖大学教授となるなど、両者の関係は深かつたのである。（かねこむねのり＝京都大学研修員・近代日本精神史専攻）